

一心に執筆中の実篤。(昭和30年代)



小説「愛と死」初版本。題字、著者名は実篤筆。(昭和14年 青年書房刊)



戯曲「愛と死」初版本。中川一政装丁。(大正15年 改造社刊)

### 三 実篤の創作態度

昭和十一年、実篤は生涯に一度の欧米旅行をし、西洋の優れた美術に直接触れて、深い感銘を受けて帰国します。昭和二十年の敗戦に向かつて、日本では暗い歳月が続きますが、実篤の文学は円熟味を増し、昭和十二年の戯曲「息子の結婚」では誠実な家族の愛情を何のけれん味もなく描きます。小説「愛と死」(昭和十四年)は、愛する者の突然の死に直面した青年の苦悩を描き、「友情」と共に長く読み継がれ、映画化もされました。ヒロインの死を描く時、実篤はほんとうに身近な人を失うかのように涙します。彼の心の中には作中人物が生きているのでした。

また、実篤は、いつでもわかりやすい率直な言葉で、筆者の息遣いが伝わるような文章を書きました。

### 四 戦後の作品群

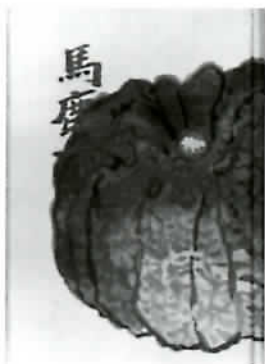
太平洋戦争が終わり、老境を迎えた実篤は、「山谷もの」と呼ばれる小説群を書き続けます。山谷五兵衛という男を狂言回しに、馬鹿一、真理先生、白雲、泰山などの人物が登場しますが、いずれも実篤の自画像のような面と、かくありたいと願う理想像の面を兼ねた人々です。彼等の世間離れた飄々たる姿の中に、真に人間らしい生き方が暗示され、戦後の日本人の心を引きつける豊かな内容を持った作品群でした。

### 五 実篤の詩

実篤は、文学を志向し始めた青年時代から、生涯を終わるまで、詩を書き続けました。その数は二千篇を越えるといわれます。それら自分でも「言葉に羽が生えると詩になる」と言っているように、口をついて出たままを無造作に綴ったような自由詩ですが、技巧や形式とは無縁の、魂がほとばしる詩であり、人の心に深く刻み込まれる力を持ったものと言えるでしょう。

### 六 実篤の自伝小説

実篤は、さまざまな形で自身のことを書きました。特に、生涯に二つの自伝小説を書き上げた「或る男」。一つは昭和四十五年八十五歳の折に書き終えた「一人の男」。どちらも長い期間書き続けた長編ですが、「或る男」には筆者のおいたちから「新しき村」創設まで、「一人の男」には「新しき村」の創設からその五十周年を迎えるまでが描かれています。これらの自伝小説から、実篤がどのように生き、人間としていかに成長していったかを、私たちは読み取ることが出来ます。



小説「馬鹿一」特製本。実篤自装。(昭和28年 河出書房刊)

# もっと知りたい

## 武者小路実篤

### 実篤の文学

18歳の実篤は、三つ年下の少女に恋心を抱き、打ちあけることのないまま彼女の帰郷による別れの悲しみを味わいました。その体験を小説『初恋』（原題「第二の母」）に書いたのは10年後、それでもなお、悲痛な思いで書くのが辛かったといいます。実篤は実に感受性の鋭い人でした。また、彼の詩や文章は一見天衣無縫のようですが、実は深く広く考えぬいた末に生み出されたものでした。

#### 一 若き日の作品群

二十五歳で『白樺』の創刊を実現した実篤は、『新しき村』の創設を経て大正時代の終りを迎えるまでの十五年間に、さまざまな人生の実体験を重ねながら、多くの文学作品を生み出しました。



村(宮崎県)の書斎に居る実篤。小説「友情」は日向時代に書かれた。顔の左下に黒く見えるのはロダン作のプロンス像。(大正12年ころ)

この時期の作品から幾つか挙げてみましょう。  
 ★小説「お目出たき人」「芳子」「世間知らず」「第三の隠者の運命」  
 ★戯曲「桃色の部屋」「二つの心」「わしも知らない」「その妹」「桃源にて」…  
 大正八年、新聞に連載した「友情」は、若者の心を大きく揺さぶる“友情と恋愛”というテーマを扱って、近代日本を代表する青春小説といわれ、今なお愛読者を失いません。戯曲「人間万歳」（大正十一年）は、宇宙を支配する神や、人間という生きものが生息

する天体の世話役（天使）などが登場するユーモラスな作品ですが、しみじみとした実篤の人間賛歌であり、後に宝塚雪組によって上演されました。戯曲「愛慾」（大正十五年）は人間性の暗い一面を掘り下げた力作で、発表の年に友田恭助、山本安英らによって上演されました。



小説「友情」初版本。岸田劉生が装丁した。(大正9年 以文社刊)

#### 二 昭和初期の伝記小説

昭和初年、日本の文壇ではプロレタリア文学が勢いを増し、実篤は過去の作家のように見なされ、自分でも失業時代と称しました。この時期には「宮尊徳」「井原西鶴」「釈迦」などの伝記を書きました。しかし、この場合も実篤はあくまで実篤流の書き方を変えませんでした。「井原西鶴」のあとがきに彼はこう書いています。  
 「我らが書きたいのは、事実の羅列ではない。人間の心に響くものだ。先ず自分が感動し、最も深い興味を感じることだ。心が益々生き生きしてゆくことだ。読者の心を生々させない作品をかくことは伝記小説をかく時も、言うまでもなく恥である。」



戯曲集「人間万歳他二篇」初版本、これも岸田劉生の装丁。(大正12年 新しき村出版部噴野社刊)